

せっかくの機会を得ても 身に付かないものは……

国際交流。良い響きの言葉だ。その国際交流が体験可能というコピーが入ったポスターが地元JAの正面玄関にあった。その名はズバリ海外農業研修。社団法人国際農業者交流協会が窓口で、主に米国とヨーロッパに1年以上の研修を行なう事業である。このような生産者が国際交流する機会を作り推進する取り組みに、JA組合員をはじめとして役員・職員たちの前向きな姿勢に対して、なぜか日本かぶれゆえにこの事業を否定するものは存在しない(多分)。

私も1978年、**20歳の時に**この米国に長期滞在できるこの事業に乗っかり、金髪・ブルーアイとの国際交流を夢見ていたが、北海道が冬で暇であるなどの事情で、夏のオーストラリアに行くことになった。現在の自分を作り上げた10%ぐらいは、彼ら彼女たちから学んだものであると言っても過言でない。ただホストファミリーをはじめ、みんな飲兵衛のグッドネイチャーの持ち主であったものの、経営に関しては私のイメージからは少し違っていた。米国より経営規模が大きく、デカイ農業機械を使っているから、オーストラリアはさぞかし世界一の農業国

だと思っていた。しかし、旧宗主国の農業の悪影響を受けた教科書通りに、物理的にフェンスが存在する「囲い込み」農業を行なっていた。

また、みんなV8のデカイ車に乗っていると思っていたが、実際には違っていた。オーストラリアでは、当時から日本車、それも三菱車、スバル車が多かった。理由を聞くと「我々のスピットファイヤーと互角に戦う三菱のZERO(零戦)は素晴らしい」とのこと。零戦は元々、中島飛行機(後の富士重工)が設計、製造したが、生産が間に合わず、三菱でも作られたと聞く。4輪駆動車はトヨタのランクルが多く、当時の日本車の評価は日本と海外では明らかに違っていた。私が日本人と分かる「オレは日本機を何機も落としたり、何人殺した」と平気で言う。よく聞くと憎しみからだけではなく、「アジアの小国があそこまでアングロ・サクソンとよく戦った」と、一種の尊敬の念も込められた言葉であった。「もは

Vol.17 海外研修イッたふり



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

や戦後ではない」の言葉を、戦勝国で否定された思いだった。

現在も2軒のホストファミリー、その関係で知り合いになった数軒の家族とはクリスマスカードを贈り合っている。今年2月には山火事で被害が出た時は電話でやり取りし、10年に1度は訪れる。交流し続けることがポイントです。実際、長沼をはじめ多くの若者がこの

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

海外農業研修を利用し、いろいろなことを学ぶ機会を得ているが、多くはその後のフォローができていない。

それとたまたま戦勝国になった中国や2回も戦争に負けたドイツのよいうな国々から学ぶことはリスクが大きすぎる。良いか悪いかの基準は別として、この世の中、アングロ・サクソンの英語圏を中心に回っていることを正しく認識すべきである。帰国後「あゝ面白かった」ではススキノに遊びに行くのと同じだ。クリスマスカードやEメールがあるのだから、積極的にコミュニケーションをとるべきだ。タダで「戦勝国の勝利の方程式」を学べる。

また帰国組の中で案外多いのが、その派遣国を馬鹿にする発言である。これにはとてもがっかりする。特に米国帰国組はひどい。これでは戦前に米国・ワシントン駐在武官の半分が米国嫌いになった伝統をそのまま受け継いでいるかのようだ。

ある者は、米国嫌いの理由のひとつに「米国人は土日に休んで怠け者の浪費家ばかりだ」と言っていたが、その言葉は、そのまま今のどこかの国に当てはまるかもしれない。

それに米国に2年もいてマトモな英語をしゃべれない農家のご子息が多いのも事実だ。確かにアミーゴたちと朝から晩まで顔を突き合わせて

いたら、英語よりもスペイン語の方がうまくなるらしいが、それも米国の強さであることを認識すべきだ。まっ、できっこないよな。できたらマトモな農家になっているよな。もちろんこの私も英語では苦労した。オーストラリア英語では標準語の「エイ」の発音が「アイ」になるのは知っていたが、実際に聞くと全く分からなかった。よく使う助動詞のCan Notの発音もほとんど女性には失礼な言葉に聞こえてしまい、下手に真似をすると大恥をかくことになる。もし、その意味を知りたい方は編集部のイギリス帰りのハンサムボーイにお問い合わせください。

バイオ技術が農業を救う…… 20年前のあの話は?

そういえばオーストラリアにいた時のある会合に呼ばれた。その時、私はロシア人が嫌いだ、なぜならば……と話した。その当時、かの地ではほとんどがイギリス系やアイルランド系移民で、わずかにホストファミリーのようなドイツ系がいる人種構成だったので、先ほどの発言になった。ところが、ちよつと離れた場所で見ているカププルがいた。いやゝな雰囲気、こちらにやってくる。まだ日本には行ったことはないが、

いが、日本を嫌いではない」と典型的なアングロ・サクソン表現で皮肉られた。「しまった」と思ったが、後の祭り。地元で他人の悪口を言う前にその親戚かどうか確認するのが同じように、**民族間の微妙な配慮**が必要なことを学んだ。

私が行った海外農業研修は、当時ホクレンが行なっていた。帰国後十数年が経ち、同窓会が行なわれ当時の担当者も来ていただき、最近の状況について話があった。1993年当時では、すでにホクレン主催で海外派遣事業は行っていないとのこと。理由を聞いて驚いた。当時の担当者の話では「農家も豊かになり、英語もまともにしゃべれない馬鹿息子どもはプライドばかり高くて、よそ様で働くことなんてしないよ」。ついでに「後を継いでほしいものだから車を買ってガソリン代も支払う親もおかしいが、その息子も将来はどうしようもない(事実その様になった)」。酒が入って、つい本音が出たのだろう。私たちが行った前後の年がピークで、その後、海外派遣の申し込みも毎年少なくなり、結局この事業は社団法人国際農業者交流協会が引き継ぐことになったそうだ。当時と比べて日本農業は豊かになったか。その頃、バイオなる言葉が登場して、日本農業を豊かにして

れるとメディアは騒いだが、現実現場ではどれだけのことが導入されたのであろうか。この20年で味噌や醤油を今までの半分の期間で作れるバイオの技術は素晴らしいことだが、同じ20年で農作物が半分の生育期間になった地域は存在しない。農薬や資材がバイオの力で残留性や安全性が高まったことも知っているが、最終的に本来発揮できる能力を潰しているのは農業生産者自身である。その一番の例が特定除草剤耐性作物の導入への反応である。

反論の根拠は「消費者」の存在である。この言葉の違いもアングロ・サクソンから学んだ。日本では「消費者は神様」であるが、英語では「消費者は王様」と言う表現になる。ヤンキーに聞いてみた。いわく「神は死なないが、王は死ねば別の考え方をする王に代替わりする」だ。どうですかみなさん、アングロ・サクソンの現状に対応する素晴らしいこの知恵は。我々自らも消費者であるのに「消費者は神様だ」なんてこと言っていたら、また戦争に負けますよ。その結果生まれる貧乏、貧困から学ぶものは何もない。

ホクレンは海外研修制度をやめて良かったのかもしれないね。少なくとも私のような存在はしばらく登場させないのだから。